

マッキンタイアのアリストテレス理解
——「人生の統一性」に注目して——

渡辺華月（龍谷大学）

マッキンタイアは『美徳なき世界』において、アリストテレスの徳論を理論的支柱としながら、共同体に関わって生きる個々人の人生の統一性を物語として理解する、いわゆる「物語論」を展開している。「共同体主義」「アリストテレス徳倫理学の復権」などのラベルでもって扱われることが多いマッキンタイアであるが、アリストテレスが諸徳を目的論的自然観と一致する形でそれらの役割を考えていることに対しては、彼は明確に距離を保ち、諸徳は実践を通じて「人生の統一性」に関わるなかでその持ち前を齟齬なく発揮するとする。

「人生の統一性」という観点は、アリストテレス自身のものではなく、『ニコマコス倫理学』から文献学的解釈によって導き出されるものであるとは考えがたい。いわば発展的解釈であるが、かといって単なる恣意的解釈というわけではない。マッキンタイアとしては、アリストテレス倫理学を彼なりの筋道に従ってそのエッセンスを改めてとらえなおした結果出てきたものである。本稿では、マッキンタイアがアリストテレス倫理学から、直接アリストテレスによって書かれているわけではない「人生の統一性」を徳論の要として見出すことがいかなる筋道によってなされたのか、またアリストテレスに結びつけて「人生の統一性」の内実をとらえることが彼自身の物語論展開においていかなる役割を負っているかを明らかにしていきたいと考える。

以下の手順で論じるものとする。

(1) マッキンタイアはアリストテレスをたんに一個人の理論家とみずに、一つの長い伝統の代表者として扱い、われわれの倫理観も「アリストテレス的伝統」のなかにあると見立てる。その見立てにおいて彼がよって立つ倫理的視点を確認する。

(2) マッキンタイアはアリストテレス的伝統のなかで受け継がれてきた諸徳の概念を分析しながら、それらがいかに実践において連関をもちうるかを問い、アリストテレスの徳論の問題点と優れた点を述べている。その詳細をたどる。

(3) アリストテレス的伝統において徳論が受け継がれていくなかで、本来問われるべきであったが問われることのなかった問いとして、マッキンタイアは「人生の統一性がはたして成立しうるか」という問いをあげる。なぜそのことが問われるべきであったのかを考察する。

(4) 「人生の統一性」という概念のマッキンタイアの物語論展開における重要性を確認する。また、そうした意味での物語論が現代の倫理としていかに活かせるかを考察する。